
木刀物語

山の麓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

木刀物語

【Nコード】

N2069Q

【作者名】

山の麓

【あらすじ】

母と二人きりで暮らしてきたコクト。
ある日母から、木刀を授かる。
今はもう亡き母の遺言通りに、コクトは旅に出ることだ。

序章

僕は母と、二人きりで暮らしてきた。

深い深い山の奥、ぼっかりと木が開いた所で。

僕と母以外、人はいなかったけれど、毎日楽しく暮らしていた。

「コクト。こつちに来なさい。」

ある日、母が僕を呼んだ。

母のもとへ向かうと、母は、切り株に腰かけ、その両手には木刀を持っていた。

母の前に座ると、母は微笑んで言った。

「コクトはもう六歳になったわよね？ふふ。大きくなったわね。」

そして母は、手の中の木刀に視線を移した。

「この木刀はね、お母さんの一族に代々伝わる秘剣なの。見た目は木刀だけれど、使い手によっては普通の剣よりも強くなる。物凄い剣なのよ。」

「物凄い剣？」

僕の疑問に、母は丁寧に答えてくれた。

「ええ。普通の木刀は鞘と持つところに当たるところの間に飾りや印として線をつけているでしょう?」

「うん!真剣なら、抜けるところなんでしょ!??」

自慢げに言う息子に彼女は嬉しく思った。成長したんだと、改めて思った。

「そう。でもこの木刀はね、印や飾りじゃないの。本当に、抜けるのよ。」

母の言葉に、息子は期待に満ちた声で言った。

「え!ほんと?抜いて抜いて!」

しかし母は、少し悲しそうに言った。

「ごめんなさいね。お母さんにはできないの。」

息子は首をかしげる。

「どうして?」

「この剣を抜けるのは、一世代に一人だけ。よほどの使い手じゃなきゃ、抜くことはできないわ。お母さんも、少し前までなら、抜くことができた。でもね、この剣は、別に、もっと強い人が現れたら、持ち主でも抜くことができなくなるの。」

「お母さんよりも、強い人がいるの?」

さすがだ。頭の回転が速い。

内心苦笑しながらも彼女は、少し残念に思った。

私もう少し生きれば、この子をもっと見ていれたのに。

「ええ。今は私よりも強い人がたくさんいるわ。」

「そうなの??？」

少し残念そうに言うわが子に、母は微笑んだ。

この子は、きっと、きっと強くなるだろう。

この木刀が抜けるくらいの剣豪になれるだろう。

だけどその時には私はもういなくて。

なんて思っていると、コクトがいつの間にか、自分が持っていたはずの木刀を持っていた。

「ねえ、お母さん。この木刀、普通のよりちょっと重たいね。」

彼女ははっとした。

確かに、この木刀は少し大きめに作られている。

だが、普通の人間には気づけない位しか変わっていない。

それにこの子に木刀を持たしたのは一、二回ぐらいしかない。
なのに。

この子は間違いなく『本物』だ。

「コクト。この木刀はあなたにあげるわ。」

そんな母の言葉に、コクトは嬉しそうな顔になった。

「いいの！？僕が持つてて」

「ええ。コクト。あなたはきつと、世界中に名が轟く、立派な剣士になる。いつか、これを抜くことができる日が来たら、その時は、人のために、抜きなさい。」

それを聞いたコクトは、微妙な顔をした。

少し、この子には難しかったかもしれない。

でも、大事なことから。

「いいわね、コクト。」

その言葉に、（多分、よくわかってないが）コクトは頷いた。

「うん！『その時』がきたら、『人のために』木刀を抜けばいいんでしょっ?。」

「ええ。あなたならきつとできるから。頑張りなさい」

よく意味はわからなかったが、母の言葉を使いながら言ったら、母は微笑んでくれた。

これが、僕が覚えている、たった一つの母との思い出だ。

サクヤ(前書き)

第二話です。

今回すいじく長いです。

サクヤ

よく晴れた、ある朝のこと

ある山のふもとにある小さな村の宿屋の門の前で、一人の少年が、女将と主人に挨拶をしていた。

「よしっ！おばちゃん、お世話になりました！」

パンパンに膨らんだ荷物を稼いで、少年は宿屋の女将に挨拶をした。

「ええ。こちらこそありがとうねえ。あなたほど色々手伝ってくれたお客さんは初めてよ」

女将は嬉しそうにお礼を言った。

二日間、この宿に泊まっていたのだが、その間、暇を見つけては二人を手伝ってくれたのだ。

「ああ。こんなにいい客は初めてだねえ。まき割りも手伝ってくれてありがとうな」

妻の言葉に、主人も感動したように言ってきた。

そんな二人の言葉に、少年は笑って答えた。

「お世話になったから、これくらいはしないと。じゃあな、おばちゃんおじちゃん、ありがとうな！」

そう言って、少年は歩き始めた。

「え〜っと…確かこっち…」

そう言いながら、担いで荷物の中から、地図を取り出す。

この辺の地域は初めてだから、地図を見て行くしかない。

「次は『クミナシティ』かあ…おっきいとこだといいなあ」

地図を見るかぎりには、この道をまっすぐ行けばすぐ着く。

「よし。今日中には着くぞ！」

そう決心すると、少年は足早に歩き始めた。

クミナシティのある武器工房

そこで、ミハエルは、一人、長剣を作っていた。

そこに、甲高い声が響いた。

「お父さん！なんで私なのよっ!？」

工房に入ってくるや否、怒鳴り始めた娘に、父はあっさりと言った。

「おや。サクヤは武器を作るの得意じゃないか。」

そんな父の言葉に、サクヤは詰まった。

「そうかもしれないけれど……。でも、私、品物になるようなのは作れないわ！」

「大丈夫だって。お前はもう、立派な武器職人なんだから」

父は優しく言う。

「何かあったらサポートするから。頑張りなさい。」

「……………」

サクヤは、父が好きだったが、特に、武器職人として働く父が大好きだった。

自分もあんな風になりたいと思い、父の真似をして武器を作り始めたのが三年前。

最初は父にもばれないようにこっそりやっていたが、二本目に作った槍を褒められて以来、作るたびに父に見せるようになった。

それ以前から、槍使いとして活躍していた為、槍は、ちゃんとしたものが作れるようになった。が、今回の注文は剣だ。

「だって、剣でしょ！？私、ろくに触れないのよ??」

剣は、嫌いだ。触るのが。

最近は、見れるようになったけれど、少し前までは見るのも嫌だった。

見ただけで、吐き気がするほど。

だが、父は少しも揺らがない。

「触れないなら、触らないで作ればいい。それぐらいはできなきゃ、一人前じゃないぞ」

「一人前じゃなくていいもの。」

頭を下げ、彼女は言う。漆黒の髪が、炉の灯りでオレンジ色に輝く。

「私は、一人前になんか、なりたくないの！！」

彼女は叫ぶなり、工房を飛び出した。

もう夕暮れで、今からじゃ友達の家もご飯の準備で忙しいだろう。

何処へ行くこうか悩んでいた時、気がつけば町を出て、街道に立っていた。

武器の材料で、鉄や鋼などを遠くの町から取り寄せたとき、この街道を通って運ばれてくるのだ。

小さいころから父の付き添いで、運ばれてくるたびにここに来た。動かずに、立ちつくしていたサクヤだったが、しばらくして、人が来た。

「誰…？」

見たこともない容姿の少年だ。瑠璃色の髪と瞳。どこかの貴族？

サクヤの呟いたような言葉に、少年はにかつと笑って言った。

「あ、俺？俺はコクト。旅してる。」

旅か…小さい頃、よく旅に出て、困っている人を助けたいと思ったことがある。

懐かしいな…

そう思うと、なぜか積極的になってしまう。

妙に親近感が持てるのはなぜだろう？

「旅してるの？クミナシティへようこそ。私はサクヤよ」

「やっと着いた…」

少年は、ホッとしたように言った。

それにサクヤは、微笑む。

「ね、今夜の宿、決まってるなら家にいらっしやいよ！きつとお母さんたちも喜ぶわ。」

その言葉に、少年は嬉しそうに言う。

「いいのか？よかった。そろそろ路銀も底をつきかけてて…」

しかし、最後まで言い終わる前に、彼女はまたも微笑んで言う。

「ちよつどよかったわね。でも、ただで泊まらせてあげるんだから、私の言うこと、全部聞いてもらっつわよ」

少年は首をかしげる。

「？」

彼女はただ、笑っている。

「ええ。当然でしょう。これから三日間、私の言うことを聞きなさい。いいわね？」

「いや…二日後にはこの町を出る…」

コクトが言い終える前に、彼女は一言。

彼女は、有無を言わさない口調で、ただ、言うだけだった。

「いいわね？」

コクトは、しばらく無言を続けていたが、威圧に耐えられず、頷いてしまった。

「は…はい」

それに、サクヤは、女の子じゃないような、恐ろしい顔になって…

「返事は『はい、サクヤさん』でしょう？」

コクトは、ただ言葉を返すことしかできなかった。

「は…はい、サクヤさん！」

サクヤは夕食で、コクトを紹介した。

サクヤの横に座ると、サクヤは話し始めた。

「旅をしているんですって。今日この町に来たばっかなんだ。」

「…コクトです。今日から三日間、お世話になります。」

サクヤに合わせて、コクトは名乗った。

すると、目の前に座っていた、コクトより四つぐらい年上っぽい女性性が、話しかけてきた。

「サクヤの姉の、アルアです。ゆっくりしてって。あまり大したものはないけれど。」

名乗られたら、褒めるのが常識だと、昔誰かに教わったことがある。

「アルアさん。とってもいい名前ですね！」

効果は、抜群であった。

「ふふ。良い子じゃない。可愛いわね。」

普段は敬語を使わないコクトであったが、横からの厳しい視線に、敬語を使わざるを得なかった。

コクトは可愛いなんて今まで言われたこともなかったので、ちょっと恥ずかしかった。

すると、アルアの横、サクヤの前に座っている、優しげな女性が褒めるように言ってきた。

「あなたの髪と瞳、きれいな瑠璃色ね。珍しいわ。なんて綺麗なんでしょう…」

コクトは、今まであまり気にしてこなかったが、自分と同じ髪の人を見たことがない。

コクトが知っている限りでは、この髪をしているのは母と、自分だけしか知らない。

「あの…この辺りに、この色の髪をした人とかって、いないんですか？」

恐る恐る聞いてみると、彼女は頷いて言った。

「ええ。私、こんなに綺麗な髪を初めて見たもの。」

コクトは少しさびしいような気持ちになった。

「そつなんですか……あの」

お礼を言おうと思ったが、彼女の名前を知らない。

サクヤの母なのだろうが。

困っていたら、それを察した彼女はごめんなさい、とでも言うように言った。

「あ…私ったら。私はこの子たちの母で、サリよ。よろしくね。

コクトくん。」

「はい。こちらこそ、お世話になります。」

「本当に、できた子だね。」

いままで、会話の中に入ってこなかった男性【ひと】の聲が、部屋に響く。

「ええ。サクヤも、よく見つけてきたわね。」

サリ も付け足す。

「たまたま街道であったの。宿も無いって言うし。」

そんな妹の言葉に、姉は首をかしげた。

「旅をしてるって…何かを探してたりするの？」

その質問に、コクトはうなずいた。

「お…僕には、大きな目標があるんです。お母さんの遺言でもあるんですが。

それを達成するには、はるか遠くまで旅をして、強くならない

。そのため、今は仲間を探しているんです。」

「えらいわねえ。で、どんな目標なの？」

「やましいことじゃないなら、教えてくれないかしら？」

「ぜひ、教えておくれ。」

口々に言われ、コクトは詰まった。助け船を出してもらおうと、サクヤを見たら、彼女は楽しそうな顔をしていた。

「そうよ。時間はたっぷりあるんだから。」

どれぐらいの時間が経っただろうか？

話し続けていたから、のどと口はからからで痛い。

「　ということなんです。」

「ほお。なるほどねえ。じゃあ君は、そこそこ強いのかな？」

アルアはどこか面白そうな声音で聞いてくる。

「はあ…そこそここですけど……」

その言葉を待っていたかのようにアルアはノリノリだ。

「そう。なら、サクヤと戦ってみたい？この子、とっても強い。
きつといい体験になるわ。」

サクヤは驚いた。なんで!?

「お姉ちゃん！」

「良いじゃない。ちょっとしたお遊びとして、だし。」

「そんなあ」

サクヤは嫌だった。

コクトはサクヤをちらちら見ながら言っ。

「別に良いですけど……サクヤさんは？」

さっきの話を思い出して、サクヤははっとした。

コクトの武器は、木刀だ。

それなら、多少手を抜いてもお互い傷つきはしないはずだ。

「いいわよ。」

「えっ…」

「そうねえ。どうせなら、なにか賭けでもしない？」

「たとえば？」

「コクトは仲間が欲しいんでしょ？」

「うん」

「私が負けたら、一緒に旅に出てあげるわ。」

「おっ！」

「そのかわり、私が勝ったら、私のお願い、聞いてもらうわ」

「お願い？」

「私が勝ったら教えてあげるわ。」

自信満々の彼女にコクトは少し不思議に思いつつも、頷いた。

「はい！喜んで受けます。」

サクヤ？（前書き）

第三話です。

サクヤ？

「　　というわけなので、明日庭を使うわね、お父さん」

コクトの言葉を聞くなり、アルアは微笑んで父に言う。

「ああ。二人とも頑張りなさい。」

「ええ！」

「はいっ！」

二人は意気込む。当たり前だ。お互いに、願いを叶えるために。

「ルールは…いつも通りでいいわね？」

「ええ」

「？」

アルアとサクヤのやり取りに、コクトは首をかしげる。いつも通り？

「あっそっか…コクトは知らないわよね。」

サクヤは納得したように言ってきた。アルアは慌てて謝った。

「ごめんなさいね。サクヤと私でよくやるのよ。」

「ほぐ仲がいいんですね。」

「ふふ。本当にいい子。じゃあ、改めて説明させてもらおうわ。よく聞いといてね。」

「はい」

「ルールは簡単。先に一本取った方が勝ち。または、降参と言わせれたら勝ちよ。」

「そんなに簡単なんですか！じゃあ、すぐ終われますね」

コクトは驚いた。勝負とは、そんなに簡単にできるのか。

「…そう思えるのは、今だけよ」

肩をすくめて言うアルアに、コクトは首を傾げたが、答える者はいなかった。

アルアは、さっと話を切り替えた。

「さ、そうときまったらもう寝ましよう。コクトくんも、疲れているでしょうっ？」

「は、はいっ」

なんか言ったのだろうか。申し訳ないです…。と、心の中で謝る。

すると、サクヤが姉の言葉にうんうんと頷きながら続けた。

「確かにそうよね。この町まで、ずっと歩いてきたんだもんね」

アルアは、軽く頷いて言う。

「じゃあ、コクトくんはサクヤの部屋で…」

それに、すかさずサクヤは言い返す。

「なんで私の部屋なのよ！」

アルアは、気楽に答える。

「だって、サクヤの部屋が一番広いじゃない」

サクヤはうっと詰まった。

父と母は同じ部屋だし、アルアの部屋にはサクヤ特製の試作品やなんやら置いてある。

一人が寝るのがやっとな小さな寝台しかない。

その点サクヤの部屋は、アルアと同じ広さだが、家具は少ないし、物もあまりない。

「そ、そうだけど…」

「決まりね。コクトくん、お風呂どうぞ。私たちはもう入ったから。残り湯で申し訳ないけど」

サクヤが詰まって、言葉を探していると、すかさずアルアは続けた。

「ありがとうございます」

コクトは、軽くお辞儀をして礼を言った。

「ふう…いいお湯だったなあ」

コクトは風呂からあがると、母屋と風呂をつなぐ渡り廊下から外を見ていた。

廊下は、木できており、床と天井は満遍なく木が敷き詰められているが、横は腰から上の高さぐらいから窓が天井まで伸びていて、外の夜景を堪能できた。

もう亥の刻をまわっている。街に灯りはぼつぼつとしかなく、静けさが漂っている。

それは、どこか、母と暮らした山を思い出させる。あの山も、静かだった。

物思いにふけるコクトに、少し離れた所から声が上がった。

「明日、本当にやるつもり？」

コクトがなかなか帰ってこないの心配だと姉に言われ、仕方なく見に行くと、コクトは渡り廊下から外を見ていた。

声をかけると、無表情だったその顔に、見る間に表情が戻っていく。

「サクヤさん……」

驚いていない彼の横にサクヤは立った。

「やっぱり、サクヤでいいわ」

年下には、『サクヤさん』と呼ばせてるのだが、彼ならいいかも。

「この町は、とっても平和だね。領主さまも、良い方だし。」

するとコクトは、早速敬語を止めた。

「……この町を、離れたくないのか？」

サクヤはこの町を好きだ。ずっとここで暮らしたいとも思う。でも。

「……この町は好きよ。この町に住む人たちも。けどね」

「……」

コクトは黙ってたただサクヤをじっと見ている。

「私だって、この町から出て、旅をしたいと思ったことはあるわ。」

「なら……」

コクトは、ぱあっと顔を明るくするが、サクヤは、下を見て、小さ

く言った。

「でも、出られないのよ」

「なんでだ？旅に出たいんだろ？一緒に行こう！」

コクトは、首をかしげつつも手を差し出す。

「……………」

サクヤは、なぜか、震えている。一体どうしたのだろうか？

「大丈夫か？」

しかし、その言葉にこたえる間もなく、サクヤは気を失った。

大きく伸びをしながら、コクトは起きた。

「ふあ〜……」

結局昨夜は、アルアとサリーを呼んで、サクヤはサクヤの部屋で、アルアと寝ることになった。

コクトはアルアの部屋で寝た。最初この部屋に入った時は驚いたものだ。

部屋の半分を槍やこてなどで埋められていたからである。

「サクヤ、大丈夫かな」

こんなことがあったのだから、もう、遊びといえど、少し無理があるだろう。

そう思っていると、コンコンとノックがした。

「コクトくん、起きてる？」

アルアだ。

「はい、起きてます」

それを聞いたアルアは、入るわよ、といって中へ入ってきた。

「おはよう。突然だけど、聞いていいかしら？」

「いいですけど…」

「昨日、サクヤと何話してたか教えてくれない？サクヤ、まだ起きないのよ…」

「…！」

それで、コクトはすべてわかった。

「つまり、サクヤが目覚めない原因は、昨夜話した内容だということです。」

それに、アルアはこくりとうなずく。

「ええ。疑うようで悪いんだけど…」

「……わかりました。覚えている限り、全て話させていただきます。」

サクヤは、気絶するまで、元気だった。夕飯も残さず食べていたし、顔色も良かった。つまり、身体的に異常はなかったのだ。

だが、コクトと話したことによって彼女は震え、そして気絶してしまった。

きつと自分のせいだろう…そう思っていたから、コクトはアルアにサクヤと話した内容を言い始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2069q/>

木刀物語

2011年2月20日10時19分発行